

出 会 い

赤 間 峰 子

周郷 博先生

昭和十六年、自分ではそんなに年をとったと思わないのに、私が先生に教えをうけた年です。この年に大東亜戦争が始まって、勤労奉仕のあとそのままモンペ姿で周郷先生の授業に出たこともありました。当時は五年間の女学校を出ると、さっさとお嫁に行く人、花嫁修業にいそむ人の多かった時代で、私はやっと一年間ならばと父の許可を得て保育実習科に入学しましたが、今の若い方々から見たら何とも幼稚な存在でした。でも何ととっても女学校の時と違い、偉いというか、重味のある先生方の講義には、ただただびっくりして一生懸命勉強したつもりです。その中の一人周郷先生は、思えばまだお若かったのですが、物静かに、考え考えお話しになる。ごようすは今と変わりませんでした。

在学中の十一月に父が全く急に死にました。その一ヵ月あと、十二月八日に大東亜戦争が始まり、昭和十七年に卒業、就職、一斉休園、終戦、再勤務、結婚、とまことにめまぐるしい時を経験しました。月日のたつのは早いもので二人の娘の内、下の娘がい

つのか高校生になりました。そのころ新聞で、あの時の周郷先生がお茶の水幼稚園の園長になられたことを知りました。そして、その新聞記事を見て、やっぱりお偉い先生だったのだなあ、と今さらのように思いました。

そしてこれが私の性分で、急に思い立って夏休みの日本幼稚園協会の講習会に出席したのです。長い主婦生活からとびこんだこの講習会は、ちょうど保育実習科に入学した時のように、私に新鮮な感激をもたらしました。帰りに園長室におよりして、その日の講師吉田一穂先生を交えて三人で何をお話したのか覚えていないほど夢中で時をすごしました。この年の暮に、私は思いがけず急に今の仕事をおひきうける羽目になりました。考えてみると、この周郷先生との再度の出会いで、先生がここにいらっしやるのならという甘え（あとでこのことではずい分先生にご迷惑をおかけしたり、叱られたりもしましたが）と、女の人も社会とつながりをもった何かをした方がいいとおっしゃったそのことが、私をこの仕事にとびこませたのだと思います。

そして四年目を迎えた今、主婦だけの生活であったならば決して得ることのできないすばらしい「出会い」の数々を経験しております。といつても私のそれは、まだ直接にはお目にかかったこととはなくて、手紙、または電話でのお声を通しての「出会い」が多いのです、次にそのいくつかをご紹介します。

敲 常良先生

七十二卷十二月号に「幼児教育から世界観へ」を執筆して下さいました。長年、モンテッソーリ教育にうちこんでいらした先生のお書きになったものは、心打たれるものをたくさんに含んでいました。殊に、よくいわれる「しあわせ」という言葉について、それが幼児教育の場合は大人の先入観のフラスされた「しあわせ」が幼児の「しあわせ」であるかのように誤解されているところから教育が間違つた方向に進んでしまったというところは、全くその通りだと身にしみて読みました。

ところがいただいた原稿には、その「しあわせ」が「しやわせ」と書いてあるのです。私はむしろ「しやわせ」でもいいのではないかとそのままにしておきました。何かこの方があなたかいい感じがしたのです、でもそれではおかしいという声もあり、私は一度先生にうかがってみようと、京都へお電話いたしました。

「ああ、私の間違いです。なおして下さいさつてけつこうです」と、とてもお若いお声、私はちょっと惜しいような気持ちで原稿の文字を直しました。まだお目にかかったこともないのですが、相当のご年配とうかがっていましたが、ちょっと笑いながら、何のこだわりもなくおっしゃって下さつたあのお声は忘れられません。いつまでもお元気で、と祈っております。

岸田今日子さん

私は昔から岸田今日子さんのファンでした。今も毎日曜日、「世界の子どもたち」というテレビを必ず見て、各国の子どもたちの心を伝えて下さる岸田さんの声にききほれていきます。ただ声がいいというだけでなく、この方はきつと子どもたちの心のわかる方なのだなと思いました。ご自分のお嬢さんと童話を合作なさるとかききましたし、一度原稿をお願いしようと思つた編集会議で相談いたしました。でも、とても忙しい方だし有名人だからと、半分はあきらめていました。

ところがある日、私の同封した返信用の葉書に、見るからに忙しそうに次のようなことが書かれて届きました。

「お手紙拝見いたしました。今丁度芝居の旅公演の最中で、二、三日だけ帰京いたしました。十一月一ぱい東北、北海道

を廻ります。原稿はとても無理だと思えますのでどうぞあしからずご了承下さいませ。なお次の機会にと申上げたいのですけれど七枚以上のように長いものは書いたことがなくて、二、三枚でしたら何とかなると思えますけれど……”

“岸田今日子”のサインはいかにも女優さんらしい字で書かれていましたが、何と誠意のある方だろう、と私は感激して、また次の機会にぜひとお返事を書きました。そして今年になって図々しく、今度は短いものをお願ひして、お忙しかろうからとあきらめておりましたところ、すばらしい原稿が届きました。六月号掲載のものです。

その上、この文章の中に出てくる“星の王子さま”のレコードは、以前に幼稚園協会の講習会で内藤濯先生が講演なさいました時に声と言葉の大切さを話されて、その時に参考にきかせて下さったもので、読者の中にもお聞きになってあああれかとお思ひになった方も多いと思います。

谷川俊太郎さん

今年の三月、新聞で谷川さんの書かれた“絵本と私”を読みました、その初めに、“私の出会った最初の絵本”として忘れもしない私がやはり子どもどころ大好きだった、野上弥生子先生記

“小さき生きもの”の名前が書いてありました。ちょうど私が幼稚園の年長のころだったでしょうか、何かという熱を出してねこんでいた私は、家の誰彼にこの本を読ませてはほとんど暗記する位好きでした。その本はその名の通り、人間と同じような生活をしている動物たちの話で、わが家の動物（犬、リス、うさぎ）は全部この絵本の動物の名前を拝借して命名したものです。

あまりのなつかしさに私はさっそく谷川さんに手紙を書きました。私がこんなに大切にしていたこの本を終戦のドサクサでなくなしてしまったこともかきそえて……。

そして思いがけず谷川さんからお返事が届きました。大きな封筒の右肩に、まるで絵本の中の文字のようにちんまりと私の住所と宛名が書かれて、その中にはお手紙と、谷川さんの書かれた絵本が一冊、そしてなつかしい“小さき生きもの”の“六ページ分のコピーしたものが入っていたのです。私は踊り出したようになります。

それから少したって落ついて、今度は少々職業意識のようなものが頭をもたげてきて、“一度、子どもの雑誌にご執筆を”などと手紙を書いてしまったのです。そして書いてしまってから折角の美しい出会いをこわしてしまったような気がして、今度はまたおわびの葉書をかいたり、われながらオタオタしたものです。

ところがその二日ほどあとに谷川さんご自身からお電話がありました。「原稿は書いてもいいが、今はちょっと長いものを手がけているので、それがすんだころに少しテーマを変えて」とのこと。私は、谷川さんという方はたしか私よりは若い、でも「小さき生きものを」お読みになった方なら、そんなにお若くないと思っております……とてもさわやかなお声でした。

そろそろ、どんなテーマでお願いしようかななどと編集委員の先生方とご相談しているところです。

野上弥生子先生

野上弥生子先生、谷川さんからいただいたお手紙には次のように書いてありました。

「野上弥生子さんとは、夏の信州での隣人で、私は赤坊のころから頭が上りません。野上さんが当時の児童文化に果された役割は小さくないと思います」

野上弥生子先生、ご高齢にかかわらず長編ととりくんでいらっしやるとか、最近の新聞で読んだばかりです。でもまた私の無鉄砲さが頭をもたげました。手がふるえるような気持ちで手紙を書き始めましたが、「小さき生きもの」のことにふれると不思議と筆が進みました。

そして折り返し次のようなお返事が、すばらしいかれた文字で書かれて私の手許に届きました。

「拝復 御手紙拝見いたしました。「小さき生きもの」は私の手もとにも一冊しかございません。あれは英文の原書がなかなかよくできてゐるので訳した次第でした。

御骨をりの雑誌になにか書いてお手数ができるとよろしいのですが、ただ着手いたしてをります長いものがございまして、且つ人いちばいの遅筆で毎日苦勞致してをります故、貴意にそひかねます。御許しを願ひます。」

(原文のまま)

文字はもちろんのこと、美しい文章に、私はただただ恐れ入りました。日本語の美しさを今さらのように考えさせられました。それにしても私のような名もない、一介の編集者にこれだけの礼をつくされる、やはりこれは野上先生のなみなみならないお人柄、底に流れる人間のまごころがひしひしと感じられたのでした。私も折返し、いつまでもお元気でお仕事完成の暁にはぜひ私どもに一言、とお願いの葉書をしたためました。

(編集部)